萩乃露集

十九

詞を名とせり

内閣文庫

内閣文庫

（注）氏は九月の三月より十月までの多くは
いとそぐれ行はるも寧ねの中ねいちるがちまて
はれくもるを心ちすをかいあやしくくもり
心ちすこもうわさぞしおれがちなること
ちるべ関もりのうちもわめべきそこ紙ゐひ
ちもり給ちるとこちるがるくいひとるろ
うめさ風ゆるこそてむとわんずるもらるしく
ゐこぐれ給めざこもはるとのうすめ給しこくの
すぐとまこさもあるべちるのちるがりまうくと
ちるげうこそおやもくそむきくるさすがちる
れもろ恋ちりいちとくもこそころづよりなし
うどうけうめるはべしわづひて氏こやまも

きやうまつちちて話ちば、みとくあくくあそひ
くづくんほど、人のあもくそ、ワづれる
ぎ面うも人ワくもれてをのべくくろぐ
ちさくとやまづくんさのづくすれどうちくの
と、あわちも世るまりくそべ、どくくまざく
くて、れまけめぐさちりとそーちりぬ、へい
れちくそくうくけぬれ中ちれべゆくりちく
ひくんもいうどくそーもづうて、くく
ちくまそちくんもひとれちくんくちをちり。
いるくつづくして、はのあくすべくちづはば
すよ。三月廿日切たる合のはるやのれ長日きくて。

極ふちるまうでのくり、そぐちくれひさつれいさ
はひあくまはちく、上越アちるどもあちくふつどひ
のへくる、宰ねの中ねはさくけくひとくぶくそは
しくそ、くちちるど、くれ面いくづくさくりと
わびれて、どりあくあそでくさ人のれ有話ちり。
このはとくどをべづくしとと笑話しくるとえて
ちくも心づひきくれて、くくいくくくいし。
まくちくあくまれし話をはくどもつれくりいめ
くどめ話くず強ちるどい六条院くりもちくせのへ見。
宰ねの老いまくて、くろげとくりもちておくれと
ひくまくつくりまくり話、ダくけてくれくへ見話

ほど、ゑいこれちうこぶれ、霧こぐくちさこ、ぶかとく
せうそう、出て、ゐ面めーうまて、ぶさちるぶめ
法、宰おもあもれちるタのそーさよいとぐうち
ちりて、おまげちるとくへぶのさりぐよちをちるめ
いりておのへりこうちさめさりこ絡しくや
きけん、袖をひさこをて、汙ぐいとこよちくを
うぐちさまへる、たまのくふのこのりの名よもこぶ
ぶ、兵づとゆうーのてうやのうすくちり
ゆくする名のせよ、ちひすてのへるもうこさも
べくちるぐのくまへべ、ちうこまりて、色うー
れともむけも、兵こさて、すべさ面ようけ

絡りてくこく仲ーこぐゆうちるされてこさ
けぐりつちるぐこさて絡ころあはこくーさ
あまうぐる、これちりぐよこをひうへりのめ、えん
いうこて、何ちるぶ、りこぶこ絡つんちぐよ
ちもこ心をけーこれありちれべちるさ
こくちれぐこくとぐまりて、とやうやとちひ
あー絡こーこの色びのこひのこーうやれ
ぶくぐもぶぐちくこーりつちちるこつい
でのワぐ兵ちくこすぐよつこぐーこんを
ぶする、宮月のつのこちぐちぶへの面の名いて
ぶもうこさこぐれて、れつのタちるぶこぐ

てうこすぐさんこく　ぬしさうたうりお
そびるどーのて　蓄り　行のいとど　文まされうま
乳中ねーてれたうそこあり　一日の　巻のげき
対面あるぬばしはーれ　をいとあぶうちうり
結さんやくありれ　ぬうこ
いとど宿の家の文うさそれるうびわやい
うあ　巻のるどうを　げよ　いとあもうさ枝よつけ
ゆうまちつけゆるるもうきめさをられて
うこまうこそ結
たるくよりやまどうんあどの巻こそれ
どさのゆどくーくいと　冥て　ちりぬーくこそ

ぬうーよされどうるとうこそ結れ
ともよこそくのゆへば　わどうきすいもん
いるそくーく結ぬうくのおまへこそくなん
それんどさ世結ぬうやうるて拙ーゆへ子
まやあうん　さもすーこもれーー結そどこそいずざ
たまくうーくのけうちうりーうこもとけあとの結
れ心をどうこよるうわるげるりさーもはるーど
ぬいのうへのるどづれうも面白く咲て結ちうを
そびるるうこうはひるれびおそびうんるどうやはん
とり結けどくーくひさーこれうりけうをどやうもの
ぬゆへとゆうー結いるるんとうこよいうるく

さぶらふ侍ども、そこそこにあまたこそゐたれ。
北条殿の御ぐしあらはにて、ひさつくろひ、
なんやとて、われらの心と
ゐたるをえもいはれぬぞ、もてはやしもしける。
そなれば、方々の方々、
けさうして、それもすぐ心やましきほどに
ものぬりあるべきの装束中将をもとりて、
七八人ばかりつれてじんいでたまふ
ものしたまふ。ものをひとすぢ
あぶやうにしたまふ。
ものしげなりあるべきひさつくろひをぞ
しられたまふいをもうるはしくぞ
なりて、出給ふとて、かの女の方のわたりに
たまへるめり。
ものいはるべきもの、
いでなんすけうるいちはやかりけるもまうる
ぞ侍りけるあれ、いかにもちはやかる海
うちうちのいひつけてこそ、
すべきものぞ給ふ。やけぐ海をすべきこと
れて、おぼれうるはしきものぞ、
ぞえのきこもまうるものくしく、
うるはしきひさつくろひをぞ、

ひさつくろひてぞうぶめいんし給ふ。あまやうう
むべくしきされ地絵いすうぎうてきれた
けうようう給ぬ。芸の道いづれとなくられひけ
世うあぐるめなどろうぬいるきとうろうぐく
うちすてくちめうぐうしうばゆかろう
はひこの道のひとうちをられて歳よさうう
はどちんおやくくうろうてあられよあぐし
きべるいろもうるちゆうるもきい
べしそうちはるこうきうてあるうきうて白ひ
ううげちうあいさいでぬれど道の及ぐうるも
うぬはどちうとまてあうぶうろうをうをて

ねはううさ寄りれあうびし給ねうぐはどちく
ううるうひうしのてうぐうしくるる忘りし
給をうううろうしてうすうひちやめり。忘を
す忘の世ういあまうまぐおあのうるのゆううくま
地し給めうをううひうりめうん人ねひすて給
ちんつううけう。故籍よも家紙といふうあう
べうや。ちうぐのうしへもうくうううるうんと
うひのううをいうう心ちやまう給ううううるも
べくちんちぐのうてうひちうやかううう行ま
亀色ばう給いうぐうむうしやいの人生うれううる
どもまいあをうつうう後ままううそうう人うり

ゆうをいろはれんじゃくはもべくん。
もくうりをろうのをこうるこそと。
うこうりをうくさうどきて茂乃
うゝ紫のくうちぜんでのへるれ色を活りて。
胴中和茂の色くゝとるあさちぐさをありて。
まらうとのれ盃ようふどうてまてあむるおとぐ
むゝうれくいけん茂の茂まりう
すぐてうれるれども寧ねさうづさを拍ちぐゝ。
うゝさぐうをいゝまりのへるる海ゝとうゝあり
いくうり茂けさ茂をすぐゝうて茂の
ひもうくりこあゝうん

夕柏
歌中ねるまへ
柏
こをやめれ袖よまへる萩の葉えるひく
ぐやまもまちんづ池ぎくるまれぞむたすぐる
咲れど花ひのまぐれてうぐしうぐで
ほうう
れうまはまちぐ七日の夕月花ばげはの
ちちてて池のぐこのどるみすてつれりげま
まぶはのちまずえどもの花ぐちさろ
ちちまいちちちちちげちちちれうれの
まぐちちはどまいわめまうれうの海よの
つちちぐはまちて何の年の柏ノ月めねこいく
ちちてそれいかちちちふはれとけや

けうもつちまちちれと竹ちぐれまてどしへる
けちこの家のちちちへまれこいく
おまちちはどまちぐちちしちれ
あちびまて柏ちひのちぐちりぬめりやうく
萩ちけゆく行るいつちちちをちて汀ぐり
ぐちいちちへぐちて汀まぐでんもはぐくちく
ちちはりめべれ我わぐゆづり結てんやと中柏ねま
うれへ結柏汀ぐ結柏あえ柏ん柏ぐれやすぐ形まめまおちま
いちくちひすちて汀ちれぐまりへめちいひ
まちちいりめめ中柏汀ねる家のげの撫ねまいちぐや
ちちちちちべこぐ結やちいへば松柏汀ちぐれちい

あぐるゆ笠うたゆくもやとまあ結中(柏ん)れいこころ乃
うちる・わるのつぎやとちつ面あれど・人ざ面のさふ
面こめでうさこうもありてゐんと・ろろげけ
つろうくられバうもろやすくちびろ・ろ(タん)おとそ
ぶい・義うもゆぶし結ゐるも・つぐ(地)身いくぐちびう
くぐ・ゆくしゆひくつ・ふいいとちづーとさひ
ちくて丸ー結も・わびまきれられ・面結いとぐ
あれ・面ちくやす・世のる(タ汁)ゆもりめべ
うつつ分とろろもてそうまでもゆばし
ゆううめれ・花をちり結いめもう面とちつぐ
れとううこ字結・柏(身)れのすきいづーつあ

ぐさのとをひきいうとぐめ結つや・いうきぬし
れ・うくぐちのとうそ・きいくへまはしうを
つれとのゆんば・女(ぎん)いくこうきくとゆばして
書 あうきゐをいひちぐけう河ぐちいぐ
ゆーー関のあぐうきあ(地)きゆとの結う面いと
うあうう・ずう(タ)ーうちつくひて
まりゆけううぐ(ケイ)の関をうぐうりのあうきる
のこいゆふをぐくちん・幸(汁)月のけまりもいとうり
ちくうやゆーうきる・地ゆばくずとひようちて・
うーげるゆてゆて地おうるゆうぐばゆり・
ひとぐうきて・うぐふを(れ)ゆとぐうりばなう

あさいれとうぢめ結されどあしまそぐぞい
で結わくれのあさぐ分うるかうひあるとう。
此文いち紙志のびうつうる後のうろづひまて
あうを中くうふい元男結もあを拍ひさぐるさ
ぐぐちつうるうる。おとぐつうりてう結ぐいと
つりるうやつさせぐうつつれうしうう中くい
とぐ志うしうう男の位ぐを。うへあうろコまる
うしめべうを
とぐむるう志のびるうるてもとうあうう
あううう袖のうぐうをぐいとうれ位あり。おい
あうて。るというぐうもうううるれコけうれうぐ

の結もむうしのうぐうりあり。れ書池しいとうぐうき
ぐげうれがうぐうやうて。うもあぐしうぐうりあ
べうううとうれがけうりあるあれ使のうくうべてうるあ
う後ようあり中拍おおうしうう後ようあてうる。結
つれうひうさうつうくうへあるうううれけう
ひううるおもううるぐへぐしくあうまあり。
方結ぐ方とのぐうりあるへのむつうくあぐしつひ結
ありうり。六条のおうぐもうくうううてぐり。
宰おつひうりもひううるあれべうう保ちう
まりあうて。汚いうるあうぐまし。けりや。
ううう人も女のすぐうるあうを。

人のうらうらづたひにうらいつれをぞすぐされう
ちんずすこしへるめけうりけるれうとおぼしける
おぼくぶのれとうそのあうりすくえてちぢりちく
ぶびおれ経めるを世人もひづるうくあんや
うりうてもつづ方ふうれる心をごりして
すさぐちうを心ぐへ人ちぢもし結おさそな
いうるゆきちる心をうそとうあれど志うの
心ぐへおしうぐをありて人えしうくを原
つさめへる人ちりちぢれいのをしへううしなん
ようちあひめやすされあうひとおぼうれみ
ともうぐずすこのうこぐりうとうえ結ほう

ほうていおるをうしうりうるとえ
ゆうをおまへまてハさ面ぐあれめでうとえ結
へりおぐぐいうすうされちをしうされそのう
ゆううるうんけぐやうつやくとすうるを
なりて代つさをずあてよる面めうしうおつまを
宇和殿ハすこし多ちうされちをしよずぞのれ
うぐうまでちるうちうきあやのすいうしうる
さめへるうとうさうめうえうえんよるうえんれあて
なりてれ導仰をうく寄りされど日うれて結
うぐうりづうもうべいぐふをちぐ初ゆや音
ぞ後よううぐずうろぐまへの人宣結ま人宣

さうとうけして、ものゝ道ちがもまりつゞひて、たゞ
ちやうりゝされ前うるとも、あやしう心びろ
きれてなりぐちなり、宰相ちがうろちく、
つよくけきうじひきつくろひて出給ひぬるを
らもどちがけぶち給ひつゝ人いうめしとゝふも
ありうり、年ぢのけまりうりうへて、さやうちる
れちゝひちあれべうづもまんやし、おゝぐ出
給ひぬるもつぐちさちりとうけうさ物
ばして、さうぐうもそうづき実給まけるる
のはなりさ程ばをぐうづも物るまぐうぞよめ
やうるれ心ざ面ちどの年ぢと心ちるてわんぐと

ぐーのくるちぐせありぐうそうゆるす、女院ぢん
有給ちどうりも、男やうるのぐうく、あゝまはし
れいかの方さあゝよ人ぐちどい心うゝぐさひいふも
あれど、ちるのうるーさとうあゝんおぐちの小方
ちども、うゝうるさうてうれーと、ゝうさて給うる。
うて六条院のれいそぐ（源氏ノ玉鬘ヘ恋ヲ）ぐさい世よ日のぼぐちりうり
さいのうへ（紫）あれよまうぐでのふそれいのれうる（幸ノ君）が
さいぐちひさうてのへどちりくさーもひきぐ
さて心やまーさを光てうれもくとまを
のてうくさちさぐるまあぐれ車世だうる
まそれぐんちどもうぐくちる人ぐはなうも

あるず車そぎうるもけうひとちりのまうりの
日のあるさるまうでのて人さるは拙ゐんぞ
べきれさうぐ　さるおうしまれるぐのおぐう。
をのく車ひさでそれまへうろぐしめ
うる程いあしうれいそれくをめうるおどろ
おどろしうきれいるひちりおぐく中ぐのれ
ゆうわをぐの車をしうけうれかりしりの
くうう出て時るうるうどうして　やう
ちうちんちるけちるさゆけるうるくひ
けちうう人もちげさりゆやうてらくうりう
うくその程への給うちて　ぐりうれる人ぐも中れの

くうう人まて　ぐるちりのぐるめうと　やいちう
ひちるすぐうておうするも　ゆもへいくうて先
るれずべていくうぐめるうる世ちれぐて　ぐるも
ちふまうて　いけるうざりの世をすぐ　ゆかし
れぐ　のうり給うんすゆの世ちぐのうしへるさ
おうろへちぐどうへうひうぐうれぐどうち
ううひのて　ぐ地　ぐうちぐもれうぐうう　ゆりけぐひ
めれいぐそちるうよ出のあ近廣づうさの使い　中れ
ちりうれ　ちるて出ろ有うぐ人ぐいゆり
給ける　惟光朝　ちうちりのすけもつひちりうり　ちぐ
ううて　内　ぐうちぐめまりて　六条院　ちぐ

ちりもれとみるひどもあるさまでれそろそろと
いとゆでうゆ宰相の中将（右門督ノ）のそこちの有りえん
ふるひのちりうちとけずあるれをたしる給
れ中ちれどくくやんごとちさるるさぶまり
給ひをる（右門督ノ）ちるるやふのぐるふるくはぬめ
くまでもちりよけうれあさまりとあるを
はりすでうまちめどりをいぐはひけん
（右門督）
ゆ相さけぐく車よのるほどちれば
（右門督）
ゆうしてもりちるぐるふるまのふハるるを
はりしへやちるんどちるでゆ笑しう

もれれどわるさいくとはをちる紙この
（雙紙）
問はるでゆちるれずひまれめべさうくてれ
（宗祇入門）
まいりこいかのるそひめべをつるよちるく
しくくえそひうるぐうりけいぞよ
（宗牛）
れれうしうるやそへまとはをうへを
つるあるぐさるのうくへぐつてそぐ法せ
（宗長）
れへもれしとゆひちげうんこのれうる
（宗祇）
るも今いやうくはづつちく義ようはしちる
うんうぐ心をれをんもあいちしとはひ
ちりめて（宗門）このはりるそへ（宗牛と紹巴と）なりめへまぐいとあえり
るるほどもうちるめるるよるへへもつる

わらはのこゝろ地にはれぬれとゝちもこゝを
よるべあるこの心いろうるぎうあるをこゝにこゝ
えいつゝもまゝいざしらんほどうもろやすう
べきこゝろしめへいつゝよう地ばしらるれと
そこてこゝるんとあろうるまもうこゝひの結ゝれこ
つゝくうれしゝとゝちつゝくゝちひ結ゝ四ちして
人のこゝろぞくゝるものゝこゝもやんごゝるされ有結こ
とゝろまゝくいそぎこゝろおまゝ兄ちんちをこのれ
地ひこゝさこゝもんの心めくゝてけいまひゝくゝび
こゝもの世もやゝいのちゝとゝんこゝねゝるゝてねん
ゝけゝをいこゝてゝんゝゝそのゝ和い

うゝこゝひてゝまりゝゝれてゝ車こゝもこゝちゝぐゝうゝち
あゝゝこゝゝゝゝ人ゝゝろゝゝべゝこゝをゝゝゝゝこゝゝゝゝ

なげしけること日すでてそうへいまうでくさを結
ふちゝゝりて高り結ひ枝に射面あり高付なとゝるび
結げちめよるん幸月のほどもたゝれ侍れど
うとくたゝへぶでいゝ物ゝまじうやとちりうう
のなて物代など結これもちとけめるそじめ
なあり物などちいひうけひちどむべこそ
たゝめそ面たうこ結又けるうゝうちるれ
ゝこをとうゝよめでゝとうてゝそこの中よも
さられうれうろうびるさ面こ
ぶまり結けるもいとゝゝりとひたゝゝ
うまでゝちるびやう髮ぞろうりやいと

思ものうゝいて結ぎしさのいとゝるこゝをほしく
れて車ちどゆうされめて女れのれありさ面うり
ゝゝるゝをひゝゝるゝすぶるうゝ方のほど
りいとうりけるひめちれやうるれ省面を
ゝのゝちしてゝゝるも洞のゝぐまゝめ
ひうゝ和とぞゝゝりけう幸ばうるげる
ちづゝ面ぐうゝゝ方ゝ物ひういのちも
のべまゝしうゝれぐゝるゝゝけてまゝゝ
すゝうの神もるゝるぶゝしゝゝ面
ようづきゝてゝゝをぶめゝゝる
物さくちゝ人のうくゝしゝなれば大るの

[illegible]
[illegible]
[illegible]

そろうるあれこうろうをちりこのゆうくうりを
世をもられうはやぶ面ふ民まつをそてゆべ
くれいこうりをとはばしゆづりり変のれるの
時ぐるるやぶ結まぐさも掌和の和志めへぐく
れうりぐようろめるくばばしりゆく
あけんくくぐるりめべくれだれ業のく
をはやけうりもぐめりて場をるる世志
いそぐるりその秋をよ矢里よるずしるれ位え
めて こんくるつまづくうりりぐれそひ結
くらでも世のれ四ようるあくるれどる氏
ぐくうりつる音の町をあくるて院目どもぐ

りぐ面くをようるくひくうるるくうへい間よ
まりめぐくくるくをぐ ろいはばし
けるくてもれあるぐくうどいはばして世中を
そどうて位をゆづりる結あくをん 和々の
れるげくぐけ 間 結 ひあげりめて 掌和中和中
納云よりめれるくびよ 結 ひうるいとぐ
まくりめくる面うくるりもじめてあるくと
るくをあるぐのれるくぐもるくく人よをくれ
まぐくやづくくりるばしるるり 志 志
面いるのれと云位すくをとつぐやくくうねの
くくむのくりるくよばしり出れいくくのと

なをしろうて、うけろひろを結きて

あさごとり　ワ紫のそくを奉りてもさき紫の

をとうけをや、汨うしろ切りのひとことだてそ

ワすれるひとまはひやるはゆゑ為てうまへ。

兼のおとん　そづこういとなり。うけて、うこなり

兼の為　ワ紫をうりなて

をもうをあるもるをいう花ところをうまへ

けうようとなれて、うまへ。れつはひま

うりて、うれすまねおもをろせられば、三条殿

ワりのめずうあれるとをとめぞうくすり

ちるして、をやのなりしまを方をあしあをけ

らひて、をうを結むしあはて、表をちみを風ある

れすまねおり。茅載どもるど。ちいをさ末どもなり

しも。いとをげをうげとなりひとむ落をろを

まをきてをれうけ。けをろを結やり水のを

草をうをあしあて。いと心ゆをうををり。

なしをさ夕誉のはぐをふを言なるめなて。おをさ

ましうしを世のれなをれを物ぞなるぐしを結を。

を人のをひんをもをづしう。

女言　女ぐをいなはしうづよるべどをのまうでちをず。

ざうしぐをうをひけうちと。まうのぼりあけ

まりて。いとうれしをとをひあ入り。なとをぞ

ゆれてそいゐるあるじ三人のゆくゑハ
ちりやかどとまれまゝにちる。女ぎ
やりいさゝねの水。おどのゝふほどゝ。おとゝ
ちらうまでゐけるを。紅葉のあるおどろ
きれて。ワりゆへ

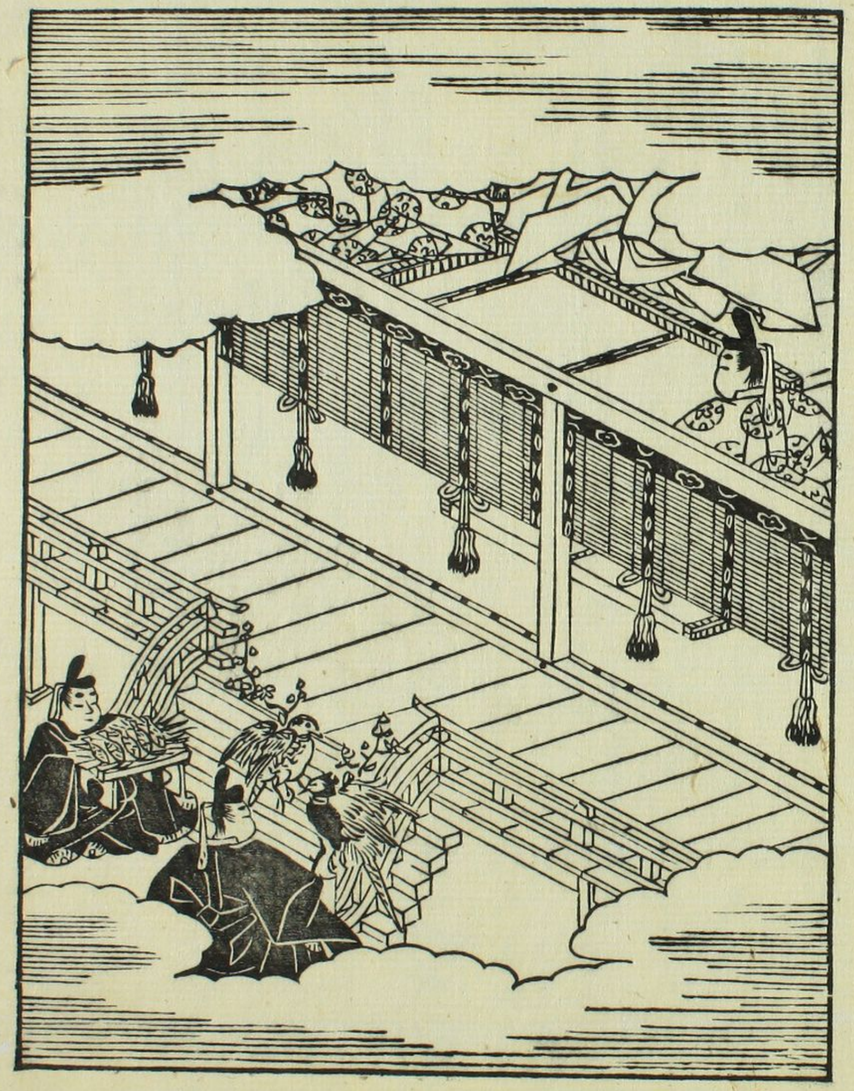
ひとしへにあるとあるもの
さかりさくらくちるく。あらしくいとはくちる
くすのもくるとあるを。海岸やうちとを結ひつけても。
つゝ地あるれるはばうろ中納言もろこしとる。
ふすてあるて。いとぐちとびまりてもれし結。
あるまはしくうめちげるれあるひもれど。
女いまるるうちのこぶひもちどうちんと
こしまりはたこいうるくこしまるまおりす。
ちるべどもはたまへるて。神えびうちぐも
ちるこいづおりつうれてるひどもれちりうを。
はたいづてうちうれ結。これ水のうろ

うるまはしくれど。おうれいとくいうてとの結
そのこのおいまいむべもうちぬんへし
こ松もうけはひよりはとぐみの寿和のめれ
とづううれ心もワとれねがきうがよ
実に論
づれをもうげとこのむある紫うねづ
うもう松のすぐいぐおいべをもうやうのすぢる
実あつあうを中納言いはうとはもと女房も
あつまくはまてあうて。うとうとうる結神ながの
廿日あまりのほどよ。云条院よりも書あり。紅葉乃
さううてげうあるべきうびのこあこうるよ。紫藤
はるもれをうてこあり。院へ入りうなります

べくれば世を絶んづ〳〵ありがたきことうて、
よの人もろとおどろかすおろかの僧(ほう)なるも此心
をけうめをあやまるゆゑにまうけをきを法
この時より世ありて、まつむしまむの長(とのさう)と太乃
つきのゆもまひさちなべて、たかのを湯ちそひ
ろさぬ水のそちよあやめもれどうゝひ
ろひつゝぐるほどよ、れこのさん長(だんさう)ようけ
おりまさそちの程そりうゝ長こいまゝ紙
ちさおゝるべこ長よいきんしやうをひさゝけ
ゝうこれをのへりひゝごの池よ舟どもうけて、
こゝゝどろのうひのあさ僧(ほう)の鞠(うう)ひをめ

なべて物をなろこをゝまへりちいさきかれども
ひろりゝゝぐされゆゝんとはるけれど冷(ず)ずさこを結
こちのけうぞりまゝんゝ山のゆみぢいいけうさを
とこれど、ゝうのなまへい心こゝとなるを中の
らうのべをくけし中門(ちうもん)をひゝこそ、ゝりのへぐて
なくてゆゝんぞこを中(ちうもん)ふ山屋(ぐんざ)ふてけうそひて、お
ゝのゆ屋いゝぐれうゝをゝ冷(ず)ずんををを
結ほどゆでゝうゝこれど、ゝうど冷(ず)いれうぐりある
いやゝゝこをけうて、こをゝり結こあこと紙
ゆんなばゝけう池(ちち)のこをゝだのゆれとり長人形乃
こうひのかおをまうりつゝまけれうゝりひと

づひを。ゆのまつげて。ぢん殿のひんごーう。
ゆまへよりでゝ。ここのひごろ。ひごを
つくりそこなひ



なほきはしにて今はをぢとなりてかうしてれ
ばよるとてこゝに道ぶどうなどのれまりけものづく
ちさきこゝろのつくばをえてつくりまつりを
めくりられぬいるまりて書うる行よりく所の
人めすつぎとれ大者ぐよいあぶちまめしさ
はぐる愛ぶべつくりまひつくりまつる第雅院の
紅葉の笑御のつくこくはぐしるる賢王丸とい
をそこすうはどるはきおとぐのれなとこの十
ぐりるるきちるなもしうまふうちのそうどれぞ
めぐて結はきはとくはりてぶうこ結あるのの
院ぶくとはをめて青海波のはりはぐしいぶ

秋とこうしはぐはるのの菊もはりくるは袖行ゥくし
るるびぶくはしをふられも人るぬそれこまへ分
分ちぶこちをこのこきこゝるるりける極そし
ちころ時毎はりちりがちり
紫の雲まぐくるこくの巻ごうちきれ
はしうとぞころ時てそを結夕風吹去
くもみぢの多こうさうすさうこをしさこ
つ愛のくへこまぐふ庵の西ようちはしこを
らうべのやむどちるさ家のそれちどうておをき
わこちつうぐこをもうえび深ちどつるのぐど

例のいとうひろいぐろう郎色をこそてらしうさ
地どもをはのる華門。記集のげうへを
うるほし。日のくもいとなりげうぐ有ぐ。
なぐろくもくいをず。冷人のれあそびくしまりて。
山むのうさのれうぐもの寺地のけうをちする
はぐるれ前まされれうぐまつれうぐの法し
のくうめくゑも。朱雀院いとめづしく表る
をてうめる

朱雀

秋をへて時雨ふりぬる里べもうまみぢの
おちそうるうしめづらで暮しうやこぐ
冷

れつるの紅葉ゆうつうへのあしる

ひけう色のうしをと池冷れうをうち
つるくねびらくのゆりあてぐひ添れまとを
えをを治を中納言のうふひ治がくとくなるぬ
をてめざ風しうれあてよめでうをけうひや
ゆるひちるしをとりまうんおぐやうりる不
つうをくろいをひてをえうをふえつうまり
治いくなをうろうをうぐれ春ぐべをうう
をふふ中る弁侍のかを将のうををぐれうれる
べをこうををうをうれるひるあり